

内科医 つれづれ草

高山浩一

①

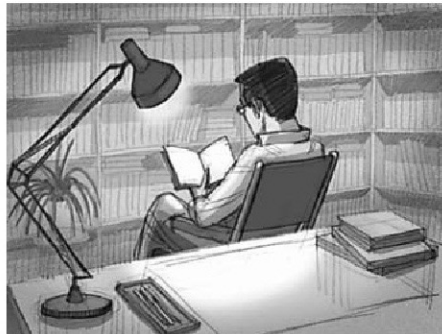
麻薬という危険なもの、違法なものというイメージでしうか。がん診療では、医療用麻薬はなくてはならない薬です。医療用麻薬は「オピオイド」と総称され、よく知られているモルヒネもその一種です。がんは進行すると、発生した臓器以外の場所へ転移します。転移した先で腫瘍が大きくなると、そのために症状が出てくることとなります。

医療用麻薬

「痛み取る」より優先

痛みという点でしばしば問題になるのは骨への転移で、私が専門にしている肺がんは骨転移の多いがんとしても知られています。肺の症状が出る前に骨転移の痛みが先行することも多く、腰痛がいつまでも続くので整形外科に何カ月も通っていたら実は骨転移だったということも決してまれではありません。このようながんによる痛みの治療には、まず通常の鎮痛剤を使用し、効果が乏しければ医療用麻薬を使うこととなります。患者さんには「中毒になりませんか？」と聞かれることもありますが、それは誤解です。正し

く使っていただけでは心配ありません。ただ、どうしても避けられない副作用がいくつかあり、特に眠気にはしばしば悩ま



イラスト・山本重也

されます。オピオイドの量を増やすと眠くなり、減らすと痛みが出てくるため、患者さんもわれわれもそのジレンマに苦しみます。痛みのつらさを目の当たりにすると、とにもかくにもまず痛みを取ることを優先してしまします。

私が以前、担当した肺がんの患者さんは医師であり、既に骨に転移していました。骨転移の痛みに対してオピオイドを処方したところ、数日後の診察で眠気を何とかしてくれと言われま

されたのでしよう。そのために、少し痛みがあつたとしても頭をはつきりさせておきたいと希望されたのです。

転院されたため最期を看取ることがかなわなかったのですが、後日ご遺族より1冊の詩集が送られてきました。もちろん、あの患者さんの最後の作品です。この詩集は今でも私の本棚に医学書と一緒に並んでおり、ときどきページを繰っては医学の薫りがする短歌に目を通しています。

詩集を開くたびに、ベッドで詩作に没頭されていた患者さんを思い出します。その姿は痛みを取るよりもっと大事なことがあると私に無言で伝えてくるのです。(京都府立医科大学教授)